

昭和66年2月1日第3種郵便物認可  
平成17年5月1日発行（毎月1回）1日発行  
俳句雑誌「沖」第36巻第5号

俳句雑誌「おき」

5月号



沖發行所

# 春銀座

林 翔

## 六十年前の思い

東京大空襲60周年を、テレビでも新聞でも報じていた。昭和20年3月10日、東京の下町は焼夷弾で焼き尽された。本郷区の私の家は無事であったが、何時やられるかわからぬという思いはあった。

戦争がまだ初期だった頃は、私は「馬酔木」のほか「野火」や「暖流」の句会にも出席していた。「野火」の主宰は篠田悌二郎、「暖流」の主宰は瀧春一、いずれも「馬酔木」創刊以来の古参同人である。或る時「暖流」句会で某氏に誘われ、「暖流」にも投句するようになった。

しかし5月23日、再びの大空襲。今度は山の手である。家を焼かれた加藤楸郎が、

火の奥に牡丹崩るるさまを見つ  
の名句を詠んだのもこの時である。

「馬酔木」も3月号は届かなかつた。3・4月合併号は僅か16頁。超厳選だから、私の句など載る筈もな

忘れぬし人かそら似か春銀座

砂糖かけ雪を食はむか春なれば

辻に出てはたと襟立つ春北風

春の闇寂けき登音近づき来

ゆきすぎて胸の微光はいぬふぐり

シヤボン玉風と舞ひをり児はいづれ

毬ころろ子供ころころ園の春

橋長きかな春光を浴びつづけ

死体屍体吾は生き東京空襲忌

路地を詠み詠みし君亡く春深む

菖浦あや逝く

かった。

しかし「馬酔木」は止められないから、「暖流」の方を止めようと私は決意したが、黙って止めるのは瀧先生に失礼。お会いしてご理解を願おうと、新宿区下落合の瀧家を訪れることにした。西武新宿線の下落合駅が一番近いのだが、同駅も戦災で焼失している。一つ手前の駅から歩くことにした。

途中は焼野が原。幾つもの無惨な焼死体を目にしながら、やつと瀧家に辿り着いた。玄関で立ったままの御挨拶。先生も立ったまま。しかし「来てくれたのは林君だけだよ。」の一言は、まだ心に残っている。

林  
翔



# 水彩画

能村 研三

## 登四郎と湘子

四月十五日、藤田湘子が亡くなった。十代で水原秋櫻子に師事し石田波郷の後を継ぎ「馬酔木」の編集長を務め、先師登四郎と林翔と三人が巻頭を競った同時代作家であった。「能村登四郎年譜」の昭和二十二年の項を見ると、

三二十六歳。「馬酔木」二句より三句に上り、新人養成機関である新人会に加わり、篠田悌二郎の指導を受けた。メンバーは藤田湘子、林翔、殿村菟絲子、馬場移公子など、毎月丸ビルにおいて熱心な研究会が行われ、遅時きながら俳句に熱中できるようになった。」とある。

湘子は登四郎より十五歳年下であったが、良きライバルの一人であったことが窺える。

登四郎の句に、

敵手と食ふ血の厚肉と黒葡萄

降れるもの湧くもの桜吹雪かな  
風はらみ落花の渦を湧かすかな  
新宿の内藤さくら降らしめよ

というのがある。昭和三十七年の作品で句集『枯野の沖』に収載されている句である。その二年後の昭和三十九年に湘子は俳誌「鷹」を創刊したが、親雑誌の「馬酔木」とうまくゆかなかったようで、この成り行きを登四郎は静かに見守っていた。

千々の枝の水面に触るる桜かな

一滴の言葉賜る春の宵

花冷や照度を落す水彩画

円満に水さす言葉さくら冷

ギャラリーの書き込み日誌あたたかし

目借時記憶もどしの一步二歩

しかし「鷹」は俳壇を代表する結社となり、多くの俳人を輩出した。

登四郎はその六年後の昭和四十五年に「沖」を創刊するが、その気持ちの中には「鷹」という雑誌の存在を十分に意識していた。

後に私が編集に携わるようになってから、「鷹」の誌面の都会的で洗練された雑誌作りを勉強するように言われたこともあった。

湘子は数年間、「鷹」誌上で一日一句を発表するなど、その闊達な活動は多くの人に影響を与えたが、登四郎が七十を越えて俳句総合誌に百句などの大作を発表したのも、湘子の一日一句から刺激されたようにも思える。湘子は、父と同門であったことから、私をも温かく見守ってくれた俳人で、「俺を親戚のおじさんと思え」と言ってくれたこともあった。代表句としては「愛されずして沖遠く泳ぐなり」。謹んでご冥福をお祈りしたい。

能村研三



# 蒼茫集



若 鮎 北川英子

一重 瞼 辻 直美

祝林先生詩歌文学館賞

光年の天も祝ぐかに春の雪  
跳びざまの反り身に焼かれ若鮎よ  
ホームステイの娘へ持たせやる雛あられ  
眠さうに白酒壺を出できたる  
夢さの袖重ね合ふ流し雛  
初蝶来明日制服を終へる娘に

春 愁 中尾杏子

ぼたん雪海へ降る夜の盗み酒  
ブロッコリー森の色して春寂し  
春愁のちりめんじやこを一つかみ  
礫像の空の潤みへ嘯れり  
沼いまだ覚めず春泥やはらかし  
こころにも零れつぐもの雪やなぎ

眼の幅に開け真夜中の雪明り  
白酒は堤の形にくびれをり  
二十四の一重瞼のひひなかな  
春の雪子の片言は琴のごとし  
封筒に波の消印うららけし  
人は日はいつも鮮らし初桜

北ひらく 吉田陽代

吹雪ふと息やすめたる間合かな  
雲のごとし桂大樹の冠り雪  
花畑 菜畑 ねむる雪の嵩  
深夜働きくれし除雪車の轍あと  
退院後百日を経たり北ひらく  
雪解水いそいそ流れつくりをり

# 潮鳴集

薄 氷 甲州千草

栓抜けば湯は臙へとほとぼしる  
音たてて水を呑む壇桜東風  
薄氷や果てへ伴ふ泡ひとつ  
やはらかく指を噛む犬夕臙  
春雨をふくみし嵩の鉋屑

凧の糸 横山淑子

山芽吹く乳房のごとき古墳抱き  
良き顔の遍路に幼な合掌す  
初蝶来石屋の石に影をどり  
春毛布かけてソファアの母寝かす  
凧の糸誰にもありし登りどき

眩しき朝 宮内とし子

アルプスの眩しき朝や雪間草  
春の稚魚全速力の行きもどり



浄土とも見えて夫恋ふ蚕気楼  
引鶴のもう振り向けぬ頸となり  
花菜風乳牛やをら立ち上がる  
はくてうの影 辻田 明

禅寺に草鞋干さるる春浅し  
花櫛作務の尼僧のうら若く  
白鳥の背にはくてうの影の濃し  
交はらぬ轍の真中草青む  
逆さまの床屋の時計目借どき

さくら 加藤はま子

石段の上へ上へとさくら満つ  
故郷を捨てし父母鳥雲に  
青空の鼓動引き寄せ凧上がる  
花冷の墨たつぷりと古代文字  
春愁の眼いつより持ち歩く

# 沖作品



# 能村研三選

冬夕焼褪せ新宿はメタリック

草萌えを土の鼓動と思ひけり

岩あれば岩のかたち春の水

春満月魚群のうごく気配して

舶来の春寒かとも碇泊灯

喝采のやうに裸木枝をひろぐ

啓蟄やふくらみはじむ熱気球

蝌蚪生まれいのちを繋ぐひかりの緒

桃の日や大和に女帝待望論

本の耳すぐ折る癖や下萌ゆる

如月の燐寸ためらひつつ点きぬ

三寒の四温に増ゆる子の言葉

下萌を覆ふハンカチ二枚かな

やはらかく石の重みを花菜漬

雲の下雲の急げる仏生会

寒土用兜太先生大笑す

東京

中尾 公彦

工藤 進

千葉

林 昭太郎

東京

坂 ようこ

笹子鳴き美しき距離生れけり

薄氷のひしと支ふる闇の嵩

春光や散りては集ふ稚魚の群

血液に数値みつしり地虫出づ

水銀のやうな日差しに雪解急

船の水尾すぐ立ち直り春疾風

春月や湾は弧を張ること忘れ

流れ木に飛翔のかたち春惜しむ

可につなぐ発心の息さくら咲く

睫毛ふと伸びたる心地風花す

あかとときの風の文様うす氷

身に捻子のあらば巻きたき二月かな

春愁を肩にたたへて盧舎那仏

桃の花乗りて電車を膨らます

餓鬼大将逝く大寒の日本晴

春の雨拭ひて仔牛糶られけり

千葉

安藤しおん

鈴掛 穂

東京

石川 笙児

全速の馬のたてがみ草萌ゆる  
 早春の一弦触るる五重塔  
 曾祖父のほひに似たり春の象  
 春一番うさぎの耳の血のほのか  
 蝌蚪の水ルンバサンバの騒ぎかな  
 露の臺出るときぽつと音しさう  
 朧夜の明かりに重さあるやうな  
 夜をつつみて降る雪の匂ひけり  
 百日を陸封のごと雪底に  
 贅沢にダイヤモンドダスト浴びし朝  
 立春を過ぎ北国は雪まつり  
 初午のなかなか昏れず絵行灯  
 木洩れ日や水輪の芯の落椿  
 よなぐもり船便でつく紹興酒  
 止め腕に花麩を浮かせ雛の膳  
 浅蜷めし古地図の江戸の水ゆたか  
 蝌蚪の紐地下鉄路線図ひとかたまり  
 鳥雲に人差指で靴はけば  
 父の世の一汁一菜百千鳥  
 春疾風長い黒髪ねらひ打ち  
 揺れ止まぬ身内のクルス青き踏む  
 衣更着や目立たぬやうに自尊心  
 春の風邪まぼろしもセピア色  
 通らせて貰ふ校庭桃の花

千葉

岡 米二

神奈川

石田 静

埼玉

服部 早苗

市川市

栗原 公子

北海道

梶川智恵子

齋藤 實

水温む気球の影が利根わたる  
 水としか見えぬ白魚手に掬ふ  
 山焼けば我が心にも火の通ふ  
 巻き返し図る走者や風花す  
 春浅し船笛試す島の裏  
 海鼠突く島の高みに狼煙跡  
 水平線見据えてをりぬ島の雛  
 春浅き枕に耳の脈のおと  
 うすらひを纏ひ松葉のあを匂ふ

市川市

岡本 崇

宮島 宏子

### 新人賞予選句（五月）

冬夕焼褪せ新宿はメタリック  
 啓蟄やふくらみはじむ熱気球  
 雲の下雲の急げる仏生会  
 笹子鳴き美しき距離生れけり  
 水銀のやうな日差しに雪解急  
 桃の花乗りて電車を膨らます  
 春の雨拭ひて仔牛糶られけり  
 春一番うさぎの耳の血のほのか  
 百日を陸封のごと雪底に  
 初午のなかなか昏れず絵行灯

中尾 公彦

工藤 進

林 昭太郎

坂ようこ

安藤しおん

鈴掛 穂

石川 笙児

齋藤 實

梶川智恵子

栗原 公子

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

冬夕焼褪せ新宿はメタリック 中尾 公彦

新宿の副都心の高層街を詠んだものだろう。新宿といえれば福永耕二先生の「新宿ははるかなる墓碑鳥渡る」の句が思い出される。あの句は二十五年以上前の新宿を詠んだものだが、新宿の様相もあの頃と随分様変わりしたように思う。林立する高層ビルの数も増え、建築意匠も窓枠がない全面がガラス張りの現代的なものに変わった。福永先生の句は中央線の車内から見た風景ともいわれているが、この句も林立する高層ビルを遠くから眺めたもので、冬の夕焼けは短くはかないが夕焼けの色が褪せ始めたたとたん高層ビルのガラス張りの窓はメタリックの色を発した。メタリックとは光沢が金属的なもので都会の近代的センスとも思えるが、都会のクールな人間関係を象徴しているように少し冷たい感じもする。「舶来の春寒かとも碇泊灯」の句長崎県の出身ならではの句で、「舶来の春寒」という表現がおもしろい。

啓蟄やふくらみはじむ熱気球 工藤 進

アウトドアのスポーツとして最近、熱気球の競技が盛んであるようだ。といつてもどこでも出来るものでなく、障害物のない平野や遊水地などで行われる場合が多い。気球にはインフレーターという大きな扇風機で風を送りこみ、気球が膨らんできたらバルーンを焚いて暖かい空気を気球の中に入れる。この暖かい空気が入ることによって気球に浮力が生まれるという仕掛けのようだ。啓蟄は二十四節季の一つで、この頃から冬眠していた虫や蛇が上の中から這い出してくるのだが、人間も春の到来と共にアウトドアの気持も高まり行動的になる。気球で空を飛ぶのは、何か鳥になった気分が夢があつて楽しい。「桃の日や大和に女帝待望論」の句、時を得た句であるが、桃の日という季語の使い方が効いている。

雲の下雲の急げる仏生会 林 昭太郎

仏生会は四月八日のお釈迦様の誕生日。花祭りとも呼ばれる。この季語の使い方、妙に仏教臭く詠んでしまつては句としておもしろくない。付かず離れずではないが、二句一章の句としてうまく詠まなくてはいけない。釈迦牟尼誕生のとき、九体の龍神が犬から降りてきて、香湯を注いだという話や、あるいは天から甘露水が降り注いだという話もある。そんな話を踏まえて、この句では天の雲の存在だけが、何かお釈迦様を連想させる。上五、中七の「雲の下雲の急げる」という措辞はきちつとした写生であるが、雲の微妙な動きに神仏の存在を予感させる。「如月の燐寸ためらひつつ点きぬ」の句、燐寸の点きが悪いという生活実感を「如月」という季語を活かしてうまく詠いあげている。(以下略)